は生きていけなかったのである。「凍りたるパン」、「凍りたる馬鈴薯」、歌われた食糧はほとんどが「凍りたる」ものである。

・われらより先に入りにし俘虜ならむ線路に添ひて凍る糞便
・糞便が凍り凍りて丈ほどに及べば下りてバールに崩す
・糞便の氷塊を手に搬びゆく氷の坂は清く清く照る
・鶏に劣る餌食よ原穀の粟がつづけばまた糞づまりくる
・術もなく漏るる尿の温く沁むうつし身よ如何になりゆく

食べれば、当然出る。生理現象だ。人間存在の根源的行為といえる排泄が集中繰り返し歌われていることに注目する。一首目はタイシェットに移される途中に見た風景。俘虜を運ぶ貨車は時々止まり、命令で降ろされ、用便することが許されたようだ。自分たちの前にいた俘虜たちのことを糞便の量で推し量る。二首目以降は収容所の様子。糞便が凍り、身長ほど堆く積もる世界。糞便の氷塊を手にしてみた風景は残酷なまでに清らかで美しい。「鶏にも劣る」劣悪な食生活が糞便にも表れる。五首目、あまりの寒さに尿意がコントロールできなくなっているのだろう。

・十字鍬刺さらずなりて頬に飛ぶ凍土(とうど)つぶての如くに痛し
・膝頭いたく尖(とが)りて死にし兵かたへに置きて雪に穴掘る
・剥ぎとりて死體をうづむ命令を身は顫ひつつ怒りてゐたり
・食へるだけ食ひて死にたきこひねがひうつし身痩せて納められたり
・凍死者のつひに出でしといふ聲が闇にこだまし受けつがれゆく
・傾きて立つ木の墓に没り日さし土に還れるものしづかなり
・面變り死にし兵らの顯ちてきて枕木ふみてゆくわれを迫(せ)む

強制労働の歌だ。一首目、十字鍬（つるはし）が刺さらない凍土。頬に飛んできた土に精神も抉られる。二首目、食糧も満足にとることができず、「膝頭いたく尖りて」死んでいった仲間の兵。本来ならばすぐさま荼毘に付し手厚く葬らなければならないが、抑留者にそんな権利はない。遺体を脇目にただひたすら命令に従うのみである。結句「穴掘る」という直截な語が何とも非情である。三首目は、仲間を葬る歌。抑留者にとって一番つらい作業は、同胞を異国の地に葬り去ることだったろう。これも「命令」である。身がふるえるほどの怒りであるが、その怒りは行動に表すことは絶対に許されなかったのだ。

・考へること面倒になりゆきてわれにも兆す俘虜型があり

人は長い間抑圧された状態に置かれると、感情が麻痺してくる。希望を失い、残酷な場面に接しても、無関心、無感覚になってくるといわれる。大内も「考へること面倒になりゆきて」と歌い、思考停止を「俘虜型」と定義する。ただ「兆す」と歌っているので、ぎりぎりのところで冷静に自分を客観的に見つめている部分もあり、強い精神を持ち合わせていたと言える。

・紙さへも持たされぬ身は板けずり物かきしるす常のごとくに
・詠みためし歌棄てがたく検査日は口にふくみて順待つわれは
・検査ごとに難をのがれきし石鹸の中にみじかき鉛筆があり

「後記」に次のような述懐がある。「鬱屈した日々をまぎらわすのに、短歌が心の